

客観的思考と現象学的態度

竹内幸哉

はじめに

哲学者というものは、ただ存在しようとするものではなく、おのれのなすことを了解しながら存在しようとするものだ、とメルロ＝ポンティは或る講義で語っていた(S.P.10)。ここで彼が「おのれのなすこと」ということと言わんとしているのは、哲学者としての仕事を指しているばかりではなく、文字どおりおのれの行為すること、つまり行動であり知覚であり言語や思考のことなのであって、事実、メルロ＝ポンティの思索の営みの大部分は、こつした主題を了解する *comprendre* にと費やされている。そのことは、彼の処女作冒頭の一文「われわれの目的は 意識 と 自然 の 関係を了解することである」(S.C.1)において、明確に表明されていたのであった。だが、そればかりではない。メルロ＝ポンティは『行動の構造』以来、こつした主題に関して理論をうち立てている他の諸学説に対しても、それをそれなりの真理として了解しようとしていたのである。それはたとえば、ゲシュタルト心理学やソシール言語学といった、メルロ＝ポンティがその優れた洞察を高く評価する人間諸科学はもちろんのこと、彼が批判的に取り扱う、いわゆる客観的思考、すなわち機械論的生理学、古典的心理学、経験主義哲学、主知主義哲学をも彼は了解しようとする、それな

りの権利を与えようとしている、とわれわれは考えている。これに対して、メルロ＝ポンティは一貫して客観的思考を批判し、この思考の偏見に染められた常識的思考から、生きられる世界を浄化しようとしていたのであって、だからこそ彼は現象学的還元によって生きられる世界への還帰を主張したのである、という反論がすぐにも提起されよう。なるほどメルロ＝ポンティは、客観的思考が理念的な構成によってわれわれの知覚経験を隠蔽している点を盛んに批判している。とりわけ機械論的生理学などは、批判し乗り越えるがためにのみ、議論の俎上に乗せられているようにも思われよう。だが客観的思考が、たんに克服されるべきものに過ぎないとするなら、現象学的還元によって客観的世界の偏見を乗り越え、知覚経験に現われてくるがままに対象や世界を記述すればいいのであって、客観的思考を自明の前提とする生理学や心理学の研究事例などは、現象学的説明を曇らせる妨害になりえたとしても、益するところは何もないということになるはずである。にもかかわらず、『行動の構造』や『知覚の現象学』では、客観的思考をとる心理学や生理学のまことに多岐にわたる研究事例が、仔細に検討されているのはなぜなのだろうか。客観的思考は、反駁するためだけに要請された、と考えるだけでよいのだろうか。

本稿のささやかな試みの中心は、従来、現象を覆い隠しているもの、乗り越えるべきものとして、つまり消極的、否定的なものとして扱われがちであった客観的思考の位置づけを、メルロ＝ポンティの哲学に対する根本的な態度から捉え直すことによって、留保つきではあってもその権利の画定を行なうところにある。

一、経験科学の現象学的予料

メルロ＝ポンティが、かなり早い時期から生理学や心理学の最新成果に着目し、それが知覚に関する新しい哲学を予期させると考えていたことは、「知覚の本性に関する研究計画」「知覚の本性」といった初期の研究活動の要約から垣間見ることができる。未だ現象学に関して一言も触れていない「研究計画」の末尾で、彼は「哲学の現状においては、知覚の問題をめぐる実験心理学と神経学との諸成果の総合を試み、反省によってその正確な意味を限定し、そしておそらくは現行のいくつかの心理学的および哲学的概念を鑄直す必要があるだろう」（PC: 13）と述べている。またフッサール現象学の重要性に初めて言及した翌年の報告書でも、現象学が批判主義哲学を乗り越える新しい哲学であること、現象学の進展によって心理学の原理が刷新されつることを指摘しながらも、現象学は心理学の代わりをすることはできない、ということ強調し（PC: 22）、どちらかといえば、心理学の成果それ自体を評価することに力点をおいているのである。すなわち、「大切なのは、心理学をそれ自身の地盤の上で改革することなのであり、心理学それ自体の方法に生氣を与えることなのである」（PC: 22-23）。このように、メルロ＝ポンティは知覚に関する心理学の最新の動向につき従いながら、その哲学的な意義を十分展開することができれば、それはそのまま現象学になるのだ、とまで述べている。さらにそれから4年後に脱稿する『行動の構造』においては、科学が存在論的前提として依拠している实在論を、擁護しさえしているのである。すなわち、たしかに科学にとっては自明の前提となっている实在論が、哲学としてみれば誤謬ではある。「しかし、その誤謬は正当な理由をもった誤謬であり、本物の現象に支えられているのであって、その現象を顕在化させることこそ哲学の任務である」（SC: 233）といっているのである。すでに若きメルロ＝ポンティにあって、哲学ないし現象学とは、経験諸科学の本質直観のなかに現象を了解させてくれる優れた洞察を読み取り、そこに一貫した哲学的規定を与えることであつたと、ひとまずは述べられよう。

しかし、ここで次のような反論が予想されよう。すなわち、こうした文脈でメルロ＝ポンティが評価している心理学や生理学の最新成果とは、たとえばゲシュタルト心理学やゴルトシュタインの全体論的神経生理学のことであって、彼らは、フッサールやシェーラーの現象学の影響を受けて経験科学の方法論的変革を推進したのであるから、それをメルロ＝ポンティが評価しながら跡づけるのも十分肯けることであり、同じ経験科学であるからといって、それらを、自然主義的態度に留まる機械論的生理学や古典的心理学の諸学説と同列に扱うわけにはいかないはずだ、という反論である。そこで、そもそも客観的思考とはいかなる思考様式なのかを検討してみたい。『知覚の現象学』では、客観的思考は、何よりもまず自己の身体を客観的对象として定立する点にこそ、その表徴があるとされるが、それというのも「客観的世界が生成する決定的瞬間」（PP. 86）は、自己の身体を対象化する場面にあると見られているからである。そしてその根底には、あらゆる存在を対自か即自の何れかに属するものとして捉える存在論的な先入観があり、対自には純粹な認識主観としての私が、即自にはその認識主観によって対象化される物が割り当てられることになる。こうして、自己の身体をも含めた即自の領域全体が、外在的諸部分の寄せ集めから成る客観的世界として扱われ、純粹な認識主観にとってこの客観的世界は、まるで眼前の物を捉えるように、いささかの曇りもなく認識されつることになるわけである。ここで注意すべきは、ゲシュタルト心理学による恒常性仮説の批判にせよ、ゴルトシュタインのシュナイダー症例の検討にせよ、それがどれほど生きられた世界の本質洞察を含んでいたとしても、結局のところ、即自と対自の二元論という偏見を克服しきっていない、とメルロ＝ポンティが見ている点である。ゲシュタルト心理学は、恒常性仮説を批判して知覚経験におけるゲシュタルトの根源性に接近しながらも、結局はゲシュタルトを即自的な存在領域に押し込めてしまつし（PP. 58-62）、ゴルトシュタインも、意識と身体の一二分法を超越することを目指し「対自と即自のあ

いだにある第三項」に接近しながらも、一度もそれに名を与えることがなかったのである（Pp. 142, n. 1）。このように、メルロ＝ポンティに言わせれば、現象学を自覚的に受けとめて方法的改革を目指している諸学説においてさえ、その存在論的前提は客観的思考と共有されていたのである。このように、メルロ＝ポンティは、いわゆる人間諸科学のうち、一方の学説の価値を全面的に認め、他方の学説を全面的に否定して論駁するといった単純な見方をとっていないことが理解されよう。

もちろん、メルロ＝ポンティは、ゲシュタルト心理学やゴールトシュタインから多くを学び、その現象学的射程を高く評価するのであるから、それらと他の客観的思考をとる諸学説とを一概に同一視することなど決してできないであろう。そうであれば、このような現象学的射程をもった心理学や生理学の成果に依拠しながら、その存在論的前提を克服することで客観的世界から生きられた世界へと還帰し、現象的身体が世界とどのように交流しているかを記述すれば、それで十分であるとも思われよう。ところが、メルロ＝ポンティの論述はそれに尽きるものではなかった。『知覚の現象学』第一部の初めでは、以後の論述の見通しが次のように立てられている。「あらかじめ何の先入見をも抱かないようにするために、われわれは客観的思考をそれが言うままに受け取り、この思考がみずからに課さないような問いは、われわれの方でもこれをこの思考に課することはしないようにしよう。」「そうすれば」たとえ、われわれが客観的思考の背後に経験を見つけたすように導かれるとしても、そうした移行はただ客観的思考そのものの行き詰まりに動機づけられてのこととなるだろう」（Pp. 86）。ここでメルロ＝ポンティは、あらかじめ現象学的方法論を自覚的に導入せずとも、客観的思考をその限界まで貫徹することによって、あたかも科学それ自身が自己変革を遂げて現象へと還帰することもあると、言わんばかりである。また彼は、『知覚の現象学』公刊翌年の講演「知覚の優位性とその哲学的帰結」

の質疑応答の場でも次のように述べている。すなわち、或る出席者から、あなたは科学の理論を知覚世界の記述に対立するものとして考えているのか、といった趣旨の質問をされた際、彼は、「科学的知識の信用を傷つけることなど問題にもなりません。哲学的な自覚が得られるのは科学を通じてのみ可能なのです。(……)科学が成熟の一定点を越えた場合には(……)それはわれわれを知覚世界の構造へと連れ戻すのです」(PC. 92)と語っているのである。そして『知覚の現象学』でメルロ＝ポンティは、生理学や心理学内部での自己変革への胎動を捉え直しつつ、それらが知覚世界や現象的身体へと還帰しようとしている様子を描いている。実際、機械論的生理学は、局所的刺戟と要素感覚のあいだには一対一対応する関係があるはずだと想定する恒常性仮説にとらわれてはいたものの、こうした考え方では説明できない多くの研究事例があることをすでに認識していたし(Pp. 87-90)、また古典的心理学も、自己の身体を記述する際に、対象という規定とは両立し難い諸性格を自己の身体に与えていたのだった。こうした諸性格の分析は、自己の身体が客観的对象ではなく、私の世界への媒体であるという認識に至るまであと一歩のところまで接近していた、ということを示しているのである。

このように、経験科学のさまざまな学説や事例をかき分けるようにして進行するメルロ＝ポンティの議論の遂行は、客観的思考をたんに現象学的説明に対峙させて斥けるばかりではなく、客観的思考をとる諸学説の自然的な行き詰まりに導かれていけば、おのれの依拠する前提を破砕して現象的身体の生きた経験を見いださざるをえないということ、そしてそれは、現象学が説明を目指して還帰しようとする現象野と一致するということ、こつしたことをともに了解しようとする意志に貫かれていたと言っても過言ではあるまい。ここに至って、科学内部での行き詰まりの克服と、現象学的説明が、手を携えることになるのである。

一、科学的説明に対する部分的評価

しかし、われわれは上述の検討をもつてして客観的思考が召喚される動機を十分に見いだしたとは考えていない。よくよく考えてみれば、このような検討は結局のところ、客観的思考の行き詰まり、客観的思考のうちに読み取れる自己変革こそが大事なのであって、客観的思考の研究成果それ自体には取り上げるべき価値など見られないということにならないだろうか。メルロ＝ポンティは客観的思考のうちに垣間見られる現象学的予料こそ評価したものの、それ以上ないしそれ以外の権利を認めようとはしなかったのだろうか。しかしながら、そう早合点してはならない。メルロ＝ポンティは晩年に至るまで、科学に対してその素朴で無自覚な存在論的前提を繰り返し批判していたにもかかわらず、科学が前提とする因果的説明や客観的世界像にも、留保つきながらそれなりの権利を認めようとする意図が見いだされることも確かなのである。というのも客観的世界は、少なくとも科学の表象するでたらめな想像物、科学による根拠なき虚構などではなかったからであり、かえって客観的思考の形成過程も、それはそれで生きた知覚経験の「自然的な一帰結」(pp. 86)だからなのである。

たとえば、『行動の構造』の次のような文脈でも、人間を考察する際に物理学的な思考様式を単純に切り捨てていいわけではないことが述べられている。『行動の構造』でメルロ＝ポンティは「構造の哲学」を標榜し、構造の統合度の違いに応じて物理的構造・生命的構造・人間的構造という三つの構造のタイプを構想し、その三つの構造の支配的な特性としてそれぞれ量・秩序・意味を挙げている(SC. 143)。同じで注目されるべきは、同じした特性は、「その当該株

序に支配的な特徴というだけのことであり、互いに他の秩序にも普遍的に適用できるカテゴリーとなるであろう」(SC. 141)と述べられている点である。つまり人間の構造は、何も意味や価値によってのみではなく、秩序や量によって、すなわち生物学的・物理学的説明によっても、考察され規定されることを拒むものではないし、同様に生命的構造を物理学的説明によって捉えることを禁じるわけでもないというのである。「生物学と心理学も原則として数学的分析や因果的分析を忌避してはならない」(SC. 142)というわけである。

もともと、因果的説明が不完全で近似的な認識の道具でしかないことは明白である。有機体がおのれにふさわしい環境をみずから作り上げ、そこに平衡を見いだそうとする生命的構造は、物理的構造を足場としながらも、その自律性を奪いつつそれを再組織化することで、生命の維持・発展という規範を実現させようとする高次の構造である。だから、解剖学や物理的諸科学の描く有機体像が正しいと言えるのは、下位の構造へと解体した有機体の、病理学の症例ないし実験室の現象」(SC. 163)に直面している場合だというわけである。したがって「たとえ物理学的分析が権利上は無限に有機体に近づきうることは認めたとしても、(…)有機体の諸構造が、言葉の厳密な意味で物理学的構造のなかにその等価物を見いだしえないということも、また絶対に確かなことなのである」(SC. 163-164)と言われるわけである。ならば、生物学や心理学が、正常な生命体や人間の独自の構造を描き出そうとする場合は、因果的な説明は無用であって、ただ日常的知覚の直観から出発してそれを記述にもたらずだけで十分なのだろうか。

それがそうでもなさそうなのである。メルロ＝ポンティは次のような例をもちだして、因果的説明が、われわれの日常的概念の理解を豊かにするものであることを述べているのである。われわれは日常的に漠然と「男性的」「女性的」という概念を認識しているが、こうした概念はたしかに個々の事実からの帰納的接近によって少しずつ認識されるわけで

はなく、表情や身振りから一挙に読み取れるものであろう。だが、生理学が性的特徴全体の基礎となる内分泌腺の影響などを発見したことは、これら日常的な概念を満たすだけではなく、「さらにわれわれの男性的存在・女性的存在の観念を変えて、常識的認識には欠けていたいくつかの部分的態度をそのなかに包含させることもできる」(SC. 171)のである。ときに因果的説明は、普段は気づくことのできない秘かな動機づけを垣間見せてくれることがあるといっているのである。また『知覚の現象学』の序論の或る註でも、メルロ＝ポンティは、説明的心理学を否認して記述的心理学の権利を主張するヤスパースを論難した上で、「意識がどのようにして自然のなかで自己に気づき、あるいは自然に挿入されて現われるかは、了解すべき問題にかわりはない」と言い、そうした問題を探究する際にとるべき唯一の方法は「科学的展開のなかで因果的説明の後を追って行き、しかる後にこの説明の意味を明確化し、それを真理の総体のなかで占める真の位置に定位することである」(PP. 13. n. 1)と述べているのである。このとき、因果的分析をおき戻すところの「真理の総体」とは現象野のことであろう。そうであれば、メルロ＝ポンティには、科学に限らずあらゆる知の営みを現象野におき戻すことで相対化し、現象野を生きる実存の世界への振る舞い方として、それらを捉え直そうとする意図があると考えることができそうである。科学的説明への評価に関しては後にふれることとして、この問題を考えてみたい。

三、実存的態度としての客観的思考

メルロ＝ポンティは「実存」という概念をいかなる意味で用いているのであろうか。動物であれ人間であれ生命体はみな、与えられた構造を再組織化して統合し、より高次の構造を作り出すことによってそこに平衡を見いだそうとする

わけであるが、そうした主体こそメルロ＝ポンティの考えている実存なのである。とりわけ人間的実存は、身体を介して習慣を獲得し、環境 Umwelt に根つきながらも与えられた環境を捉え直しつつ人間的・文化的なものを形成し、さらには世界 Welt へと超越して認識主観ともなり得る、ダイナミックな存在様態なのである。「人間とは(…)或るときには身体的になるかと思えば、また或るときには人格的行為へ赴くこともある実存のあの往還運動なのである」(PP. 104)。このように実存は、状況との相関性においてさまざまな態度で世界との交流を結んでいるわけであるが、実存論的存在論の射程にあって、即自と対自の二元論は、乗り越えられるものではあったとしても解消されてしまうものではなく、実存の或る態度のもとで表象される存在論として相対化されて了解されることになるのである。そして客観的思考も、即自と対自の二元論を前提にする以上、生きた知覚経験の諸確信を更新・増幅しながら構成された理念性の領野として相対化されて了解されるのである。そもそもわれわれは、眼前の或る対象を自立的な存在として措定しようとするれば、それだけで知覚経験の一展望に留まっていることはできない。対象の措定ということからして、すでに知覚経験を越え出ているのであり、「諸経験をただ一つの多元的定立作用にまで構成する必要がある」(PP. 85)のである。その限りで、その延長線上に形成される客観的思考は、「もともとは知覚経験の結果であり、自然的帰結でしかない」(PP. 86)と言えるわけである。

ここでメルロ＝ポンティが、客観性の実現そのものについて、これを否定したり消極的に扱ってなどいないという点を、確認しておくのも無駄ではないであろう。メルロ＝ポンティによれば「真の精密な世界の湧出」(PP. 65)は、知覚の決定的契機として捉え直すべきなのであり、「意識の全生命は対象の措定を志向する」(PP. 86)のである。ただ注意を要するのは、その際、知覚意識にはおのれを忘却することで物の構成へと向かう一種の弁証法が働いていることで

ある。ここに知覚と思考、身体と意識の断絶の萌芽がすでに孕まれているのである。そしてこうした弁証法によって、実存の超越運動が高まっていけば、運動性による時間や空間の包摂力が、言語の媒介によって思考の水準で捉え直され、等質的な時間や空間が表象され、その一点に対象を措定する普遍的な認識主観としての実存が、理念として志向されることにもなるわけである。このようにメルロ＝ポンティは、身体による知覚経験の始原的な意味が、いかにして捉え直され対象の措定へと向かい、さらに客観的世界を措定する普遍的な主観がどのようにして生まれてくるかを、探究しようとするのである。

たしかに、対象の措定へ向けられた知覚の弁証法には、決して偶然に結果したわけではない、抗い難き自然性、必然性が見られよう。その意味で「知覚とは端緒における科学のことである」(Pp. 68)と述べることができるわけだ。だが、この必然性を人間存在の絶対的規定性ないし可能性の条件と看做すところに、客観的思考が生ずるのである。客観的思考とは、こうして理念として目指され、しかも絶えず挫折する可能性をもった認識主観という実存的態度を、絶対的に基礎づけられた対自として扱い、その一方で、事実性を一挙に飛び越え、知覚の弁証法の一帰結であるはずの即自(相互外在的对象)を、絶対的に基礎づけられた出発点として客観的世界を要請する思考様式のことなのである。だから今度は、「古典的的科学とは、おのれの起源を忘れて自らを完結したものと思ひ込んでいる知覚のことである」(Pp. 69)と言い直さねばならないことにもなるわけである。したがって、客観的思考が認識主観によって世界を全面的に顕在化し、反省するものと反省されるものとの十全な適合を請け合う限り、それは断固として批判すべきものとなるわけである。だが同時に、上述のように、客観的思考が自然的態度における知覚の弁証法の一帰結であるとしたら、それはその起源から辿り直され、実存の世界への振る舞い方として相対的な権利を与えられることにもなるのである。このように

考えると、人間の生は、客観的思考のなかでみずからを否定するという能力によって定義されるが、この能力をそれは、世界そのものへの始原的結びつきから得ているのである」(P. 377)という表現でメルロ＝ポンティが言わんとしていることも理解できよう。

四、現象学的態度の二つの契機

ここに至ってわれわれは、メルロ＝ポンティの現象学に対する根本的な姿勢を問題にせざるをえないであろう。われわれは『知覚の現象学』のなかに契機を異にした二つの現象学的態度が絡み合っているという見当をつけているが、ここでその二つの契機を峻別してみたい。まずもって、いかなる定立的思考に対しても現象野の根源性を示し、その記述の哲学的意義を明確にする必要がある。というのも、なぜあれだけ執拗に客観的思考が批判されるのかを、彼の現象学的態度から理解しなければならぬからだ。メルロ＝ポンティは第一に、現象野の記述をさらに普遍的意識に基づかしめようとする超越論的哲学からの誘惑と、この記述を物理学的世界に還元せしめようとする自然主義からの誘惑をどちらも断固として阻まねばならず、それらに対して、彼は生きた知覚経験を開示する現象野を究極的な哲学的権利の場として提示するのである。すなわち彼は、意識の権能の全面的な顕在化を主張する超越論的哲学に対しては現象の事実性、生命への内属性を突きつけ、因果法則によって人間を外的諸条件の偶然性として規定し尽そうとする経験科学に対しては意味や価値、秩序の発生といった理念への志向を示すのである。こうした探索を通じてメルロ＝ポンティが見いだすのは、「能産的であると同時に所産的であり、無限であると同時に有限である」(P. 419)ような両義的な生 *vie*

ambiguousなのである。つまり、理性が自然に根づく一方で自然が理性にまで高まるような、外的偶然性を内的必然性へと方向づけていくような生きた論理（前客観的・前論理的なロゴス）を実現する生命をこそ、了解しなければならぬのである。この両義的な生こそ「真に超越論的なもの」（PP. 418）なのであるが、それというのも、認識主観にとっては超越的なもの transcendence としてしか与えられない世界・過去・物・他人などが、生命にとっては深い親和性をもつて原初的に湧出するからなのである。また、その意味で現象野は、そこであらゆる事物が湧出する唯一の場として「超越論的領野 champ transcendental」（PP. 77）だと言われるのである。

だとすれば、定立的思考、客観的思考といえども現象野からこそ生まれてくるはずである。したがって、自然的態度の延長線上にいかにして客観的思考が生じてくるのか、実存的主体である生命がいかにして普遍的な認識主観という理念を志向し、客観的世界を表象するに至るのかが、究明されなければならないということになる。そのとき現象野とは、たんに客観的思考によって覆い隠されてしまった知覚世界ないし生きられた世界であるばかりでなく、むしろそこからこそ生きた知覚経験の忘却や客観的対象の措定へ向かう実存の超越運動が生起し、そこからこそ客観的思考やそれが前提とする即自と対自の二元論が生じてくる領野であることになり、その意味でも現象野は「超越論的領野」だと言えるのである。というのも、現象野は、超越的なものがかいかにして意識の認識対象（客観）として措定されるかを了解しうる領野となるからである。こつして第二に、メルロ＝ポンティは、「この超越論的領野に客観的思考をおき戻し、客観的思考および「客観的世界の権利と限界を了解する」（PP. 76）ことを企てるわけである。このように特定領域における経験科学の存在意義を哲学的に捉え直していくことに、現象学のもうひとつの課題があると言えよう。そうした課題をメルロ＝ポンティは「超越論的課題」（PP. 76）と呼び、具体的には前節で見たように実存の超越運動の諸相を解明

しながら　もちろん実際には現象野の記述と分かち難く結びつきながらではあるが　この課題を展開していくことになるわけである。

このように、メルロ＝ポンティの現象学的態度には、(一)実存がいつさいの超越的なものとの深い結びつきを確保しつつ現象野に断固として還帰し、それを倦まず弛まず解明し続けていくこととする遡行的志向と、(二)現象野を生きる実存の超越運動の昂進を見定めることで、経験科学の真の意義をも捉え直そうとする伸展的志向　とでも名づけたらよいであろうか　の二つの契機が分かち難く結びついていることが理解されよう。

ところで、現象野を少しずつ解明していく現象学的態度の「遡行的志向」は、留保つきながら、科学への評価にも繋がってくるのである。最後に、すでに言及したこの点に触れておきたい。メルロ＝ポンティが経験科学、とりわけ当時の心理学に信頼を寄せている理由のひとつには、おのれの携わる領域を決して一挙に構築しようとはせず、具体的な存在者との絶えざる対話を通じて、事実性に寄り添いながら、その領域を少しずつ解明していくこととする態度にあった。或る種の経験科学の研究に依拠することによってこそ、「現象野にじっくり親しみ、現象の主体「実存」と知り会っておく」(Pp. 77)ことができるのである。だとすれば、経験科学の成果を手引きにするという階段を抜きにして、たんに日常的な直観を積み重ねていくだけで現象の記述をロゴスへともたらすことは至難の業であろう。たとえ科学が客観的世界の諸前提にとらわれ、現象の不完全で近似的な認識しかもたらさないとしても、それが或る探究領域との弛まぬ対話であるとするれば、そうした対話は少なくとも科学理論と現象の齟齬を示唆する契機となりうるだろうし、また因果的説明が日常的直観には気づかれえない動機づけを見いだすこともありうるし、場合によっては、経験科学がおのれの拠って立つ前提そのものを揺るがすような、現象学的洞察を獲得することも十分に考えられるのである。そうだとすれば、

メルロ＝ポンティが、現象野への還帰の階梯には、或る種の経験科学の成果を手引きにすることが不可欠であると考えていたとみることは、あながち不当だとは言いい切れまい。生理学や心理学に依拠しつつその内部からの自己変革の動きに導かれて現象野に還帰するという『知覚の現象学』におけるメルロ＝ポンティの論述の手順は、そうした考え方の裏づけとして理解することができようし、それはまた、彼の現象野解明の実践そのものの呈示であったはずなのである。なぜなら、知覚意識の弁証法的一帰結である「科学的意識とは、そのいっさいのモデルを生きられる経験の構造から借りてきているから」(PP. 71)なのである。

だがしかし、こうした検討から次のような循環が帰結する。すなわち、一方で現象野へと還帰するには経験科学の諸成果が手引きとして必要とされるが、他方でその経験科学の真の存在意義を画定するためには現象野へと還帰してみなければならぬのである。メルロ＝ポンティは「われわれは、心理学なしにことを始めることはできなかったが、また同時に、心理学だけでことを始めることもできなかった。哲学が解明された経験にはかならないのと同様に、経験の方もすでに哲学の予料なのである」(PP. 77)と述べることでこうした循環を指摘していたのであった。だが、こうした現象野の既定性と未定性の循環は、論理的な誤謬などでは決してなく、現象学運動の終わりなき展開を示唆していると看做すことができよう。そもそも現象学的「還元」の最も偉大な教訓とは完全な還元は不可能だということ」(PP. X)であり、「哲学とは先行しているはずの真理の反映ではなく、芸術と同じく或る真理の実現」(PP. XV)なのであった。

結び

このように考えてみると、先に引いた『行動の構造』の冒頭の一文「われわれの目的は 意識 と 自然 との関係
を了解することである」(SC. I)も、それが『知覚の現象学』の第3部で再びほとんど同じ文となって現われるとき
(P. 489)、その語られた内容は先の現象学的態度の「伸展的志向」として解釈することを許すのではないだろうか。
すなわち、メルロ＝ポンティが了解しようとするのは、たんに人間の実存としての意識と自然の關係に留まらず、意識
を基盤にする觀念論と自然を基盤にする實在論の關係、あるいは根本的には両者共通の根源的基盤たる両義的な生から
のこつした二元論の發生を「了解する」ことも含むのではないか、ということである。一方で 意識 を絶対化すれば、
世界は透明な意識の構成した対象となり、他方 自然 の即自的實在性を絶対化すれば、人間を含めた世界全体は自然
主義的な科学が説明する客観的諸条件によって規定され尽くことになる。かくしてわれわれは、内在か超越か、理念性
か事実性か、能動的構成か受動的發生かといった調停し難い二者択一に直面するわけである。これに対してメルロ＝ポ
ンティは、そのどちらかに与するのではなく、かといってそのどちらにも不可能になるような第三の論点を呈示するわけ
でもない。彼の目的は、そのどちらも同じ誤った前提を共有するがゆえに、現象の一面的な了解であるにすぎないこ
とを示し、それと同時に、そのどちらも正当な理由をもった誤謬であることをも示し、自然的態度の抗い難き一歸結と
して根源的現象に立ち還って両者をととも了解しようとするところにあると言えよう。

かくして、一見したところ矛盾に満ちているような客観的思考に対するメルロ＝ポンティの態度は、彼の現象学的態
度から捉え直せば、少なくとも次なる二つの視点から捉え直しうる。すなわち、(一)客観的思考が無反省に信憑され

る限り、現象野こそ哲学的解明の企てられる究極的な場であることを主張するためには、現象の根源的臆見 *Ur-doxa* を利用しながらもそれを隠蔽する思考様式として、客観的思考を絶えず排除し告発し続ける必要があるわけであるが、(二)その一方で、客観的思考が自然的態度の諸確信の更新・増幅であり、また現象野こそ、そこであらゆる学知の哲学的意義が明らかにされる超越論的領野となる以上、客観的思考には、実存の超越運動の一樣態として捉え直され、了解されるべきものとして、「相対的権利」(PP: 419)が与えられることにもなるのである。さらに(三)現象野には、具体的な存在者との弛まぬ対話を通して、少しずつ顕在化していかねばならない領域がある以上、そうした対話を怠らずに続けている経験科学の成果が、現象野解明の手引きとして不可欠な場合もあるということ、また科学が現象学的洞察をもつこともありうるということ、メルロ＝ポンティは証示しなければならなかったわけである。

こうして、現象学的態度そのものが自然的態度 一ここでは文脈上、客観的思考をとる自然主義的態度や反省的分析の態度をも含む にも多くを負っているということ、すなわち、自然的態度の諸相を生きる実存を捉え直すことこそ、現象学的態度の出発点でもあれば目的地でもあるということが分かるのである。後に「哲学者とその影」においてメルロ＝ポンティが「自然的態度そのものが現象学においてみずからを越え出る」とか「超越論的態度はなお依然として自然的だ (Signes, 207)」と言い出したとしても、われわれはもはや驚かないであろう。だからといって、メルロ＝ポンティがひたすら自然に沈潜していった哲学者だと見るのも誤っていよう。われわれが自然的態度に包まれているおのれに気づくことができるのであれば、それは哲学者にまで昂進した或る実存の、世界を了解せんとする断固たる意志に導かれてのことだということとは、承知しなければなるまい。哲学者メルロ＝ポンティは、身体を携えて自然のなかに深く根づく

おのれの昏い眼を、記述とつひつひの行為によつて奪還し、真理を設立せんと企図していった筈なのである。

括弧でくくつたメルロ＝ポンティの引用ないし参考箇所は、すべて次の略号により、その後に参照したページを示す。なお引用に際しては邦訳を参照したが、必ずしもそれに従つてゐるとは限らなかつた。

SC : M. Merleau-Ponty, *La Structure du comportement*, Paris, P.U.F., 1942.

PP : M. Merleau-Ponty, *Phénoménologie de la perception*, Paris, Gallimard, 1945.

SP : M. Merleau-Ponty, *Les Sciences de l'homme et la phénoménologie*, Paris, Centre de documentation universitaire, 1953.

Signes : M. Merleau-Ponty, *Signes*, Paris, Gallimard, 1960.

VI : M. Merleau-Ponty, *Le Visible et l'invisible, suivi de notes travail*, texte établi par Claude Lefort, Paris, Gallimard, 1964.

PC : M. Merleau-Ponty, *Le Primat de la perception et ses conséquences philosophiques*, Grenoble, Cynara, 1989.

註

「*PP*」でわれわれが念頭に置つてゐるのは、『知覚の現象学』の序文で示されてゐる「了解」概念であつて、「了解 *intellection*」を區別される「了解 *compréhension*」と異なる (PP. XIII)。メルロ＝ポンティによれば、概念的・分析的な客観的認識に先立つて、それらを支えているよつな身体的認識 (PP. 93) を実践知 *praktio-gnosie* (PP. 164) とでも言つてゐるものがあり、そこに遡及

しつづ現象の始原的意味を捉え直すことが「了解」なのである。他方「知解」とは、概念的判断によって理解することである。『行動の構造』で「物理 数学タイプの観念的分析」(SC.8)と言われているように、因果論的思考の法則的説明によって知的認識に達することだと考えられよう。

一九三三年四月に、国立学術金庫に提出された研究助成金申請のための計画書。

一九三四年四月に、同金庫に研究助成金更新のために提出された前年度の研究の報告書。

「すべての「記述的」心理学がきわめて広い意味で現象学と呼ばれもするのである」(PC.23)。

一見相反するかに思われる、経験主義(自然主義)と主知主義(超越論的観念論)のどちらもが客観的思考のなかに含意されるというのも、絶対的規定性として即自を画定し、自己の身体をもその即自の側に押し込む点では、両者は軌を一にしているからである。両者の違いに簡単に触れておけば、経験主義がただ客観的世界を忠実に再生する知覚装置として身体を捉え、その末端に心的領域を想定しているだけなのに対して、主知主義はこの受動的知覚装置に透明な意識の悟性的な判断・推論が働くことで知覚が可能になると考えているのである。また主知主義が反省的分析として観念論的立場を尖鋭化させれば、対自的な絶対的主観性が客観的世界およびそのなかに存在するあらゆる存在者を構成することになり、世界は思考によって完全に所有されることになる。

フランス哲学会の要請により、一九四六年十一月に行なわれた講演。その記録は翌年の「フランス哲学会会報 Bulletin de la Société Française de Philosophie, vol. 49, 1947」に記録されているが、そこには講演に先立って配布されたレジюме、研究報告、そして質疑応答のすべてが収録されている。

すなわちそれは(一)身体と意識との不可分離性、(二)触覚の二重感覚性、(三)苦痛の身体空間性、(四)運動感覚性 *sen-*

sations kinesthésique というた性格である (Pp. 106-113)。

例えば『見えるものと見えないもの』では、次のように言われている。「科学は (……) をまざまな存在者 des êtres の規定に成功した代わりに、存在 l'être に対する盲目さという代価を支払わなければならない、と言わなければならないのである」(VI. 33)。晩年の「研究ノート」にも、留保つきではあっても科学に対する一定の評価を匂わせるような部分が散見される。たとえば「科学と哲学」(一九五九年二月)というタイトルをつけた断章では、構造主義的言語学が共時的な言語体系 langue を見いだすことを可能にした「あたかも言語活動 langage がわれわれのものではないかのように振る舞う」その態度は、「深く哲学的である」とされ、更に次のように言われている。「前科学的なもの「生活世界の諸経験」は超科学的なもの「本質・ロ「ス」を了解するための誘いでしかなく、超科学的なものも非科学ではない。超科学的なものでさえも、科学の構成的歩みによって開示されるのだ」(VI. 235)。「」による敷衍はすべて竹内幸哉による。」)

このことは、人間的構造が、物理的構造や生命的構造をその自立性を奪いつつ再組織化しながら、高次の秩序へとそれら諸構造を統合していることから首肯されよう。人間的構造は、いつでもわれわれに与えられているものでは決してなく、いつも崩壊の危機にさらされながらも、かろうじて維持されているものなのであって、私の身体は落体の法則に服することもあれば、生理学的欲求に翻弄されることもあるのである。

なぜ現象野が真理の場と看做せるかといえば、知覚経験こそがあらゆる科学と哲学が暗々裡に当てにしている根源的な明証性の基盤だからである。「科学と哲学は、幾世紀ものあいだ知覚のもっている原初的な信憑によって支えられてきた」(Pp. 66)のである。

メルロ＝ポンティは、こつした実存のダイナミズムを生物学的実存・非人称的実存・人格的実存といった重層的な概念によつ

て検討している (PP. 99, PP. 160)。こうした実存の往還運動については、身体図式との関係ですでに論じたことがある (拙稿「身体図式と実存」メルロ＝ポンティの身体論』思索』第二九号、一九九六年、東北大学哲学研究会)。

「或る態度」とは、科学者の自然主義的態度や超越論的観念論の反省的分析の態度のことである。

われわれは、行動の主体としての実存が認識主観にまで高まり、客観的空間や即自存在としての対象の指定へと向かう際、身体図式の根本的な機能が重要な役割をなすと考えている。実存の世界への振る舞い方である身体図式は、潜在的にはあらゆる視点や対象と無限に等価な系をなしていて、この変換・照応性が知覚対象の普遍性を保証しているのである。詳しくは前掲拙稿「身体図式と実存」メルロ＝ポンティの身体論』第4節「身体の運動性と身体図式の変換・照応性」(九五～九九頁)参照。

「われわれは、われわれの経験の深部そのもののなかに客観の起源を見いださねばならず、存在の出現を記述せねばならず、また逆説的なことに、即自がわれわれにとって存在するのはどのようにしてであるかを了解せねばならない」(PP. 86)というわけである。

さらに根源的には、生命という実存的主体を時間性として、つまり「脱 存 ex-sistence」(PP. 485)として捉え直すことができれば、もはや現象野を基礎づけるものは何もないことが了解されるはずだと、メルロ＝ポンティは述べているのである。というのも、私の生命を支えている私の生きた現在が、過去や未来や他人の時間性に開かれているからなのである(PP. 417-419, 495)。普通は、科学的思考は自然主義的態度を、超越論的観念論は古典的意味での超越論的態度をとると考えられようが、われわれは両者を客観的思考として一括して扱ってきたから、ここでも用語の厳密な定義にそぐわないことは承知の上で、どちらとも自然的態度の派生的態度として考えることにする。またそれは、メルロ＝ポンティの考え方に反していないであろうことは、不

十分とはいえ、当論文で論証したつもりである。ただ、さまざまな制約上、自然的態度と現象学の関係についての検討は、ここではできなかったので、今後の課題としたい。